

新興・伝統・現代

仁平 勝

新興俳句

昭和の俳句という場合、その出発点をどのあたりに求めればいいか。年号が大正から昭和に変わったといつて、それで俳句が変わるわけではないから、なにかエポックメーキングな現象があるはずだ。とすればさしずめ、昭和の俳句史は新興俳句から始まるといつてみたい。

客観写生をスローガンに掲げる「ホトトギス」にたいして、水原秋桜子が主観の重要性を主張した。それが新興俳句と呼ばれる運動の発端である。しかし俳句も文芸なら、主観が表現されるのは当り前で、新興俳句の意義というのは必ずしもそのことではない。

発生の本質は現存を貫く。たしかマルクスの言葉だっと思うが（わたしの批評はいつもこの言葉を念頭に置いている）、新興俳句とは何であつたかという問いも、いったん俳句の発生にもどつて考えたほうがいい。

俳句という文芸は、その前身である俳諧が座の文学とい

われるように、もともと閉じられた文化的なサロンにおいて成立した。そのサロンに集う連衆と呼ばれる仲間、すくなくとも古今新古今や源氏に精通していて、サロンはそうした古典の知識なり教養の共有を前提にしていた。そうでなければ、たった十七音の言葉が五七五の定型詩として通用するはずがない。

近代俳句もまた、ある意味では子規庵のサロンから出発した。正岡子規はそこで仲間と蕪村句集の輪講などをしながら、近代の連衆を形成したといつていい。しかし子規から近代俳句を引き継いだ虚子は、俳句をもっと大衆化しようと考えた。およそ古典を近代化することは、大衆化という要素をそれ自体のモチーフに含んでいる。だから虚子の試みた大衆化は、近代俳句にとつてある種の必然だったともいえる。ただし、サロンは崩壊するしかない。

サロンが崩壊しても、五七五の定型詩が成り立つには、その代償としていわば文化的な共同性が必要になる。近代

俳句に残された季語の約束は、まさしくその文化的な共同性を象徴するものだ。季語を使いこなすには、本来ならその歴史を通して本意を理解しなければならぬ。虚子も初期には「歴史的趣味」を重視していたが（子規との有名な夕顔論争がある）、のちに歴史的な連想よりも、目の前のものを写生することが大事だという主張に変わった。つまり客観写生という理念は、そのまま俳句を大衆化するための戦略でもあった。

では先の問いにもどつて、新興俳句とは何であつたか。それはひとことでいえば、虚子の進めようとした俳句の大衆化にたいする知性の叛乱であつた。たとえば秋桜子の万葉調と呼ばれる言葉の使い方は、古典にたいする知識なり教養を前提とするもので、俳句を知的なサロンのほうへもどそうとする意図がそこにかがえる。それは同じく新興俳句のリーダーとなつた山口誓子にもいえることだ。

新興俳句はその後、高屋窓秋、渡辺白泉、西東三鬼、富澤赤黄男といった新しい世代が登場し、秋桜子や誓子の出発点から大きく展開した。そのひとつの特徴として、無季俳句というスタイルが出現したが、これは戦争というリアルな現実が目の前に現れたことと密接な関係がある。すなわち戦争という不可避の現実によって、季語に変わる大きな共同性が出現したのである。

もうひとつ新興俳句運動の大きな特徴は、そこで数多く

の同人誌が生まれたことだ。その同人誌を拠点にして、句作と同時に批評が重視され、論争も活発に行われた。それはまさに新しい文化的なサロンであり、そこで俳句という古典詩型の現代的な意義があらためて問われた。このことの価値はもっと評価されていい。

伝統俳句

伝統俳句という言葉は、いつごろから使われるようになったか。角川書店の『現代俳句辞典』（俳句）昭和五二年九月臨時増刊）には次のように書かれている。

「伝統俳句という言葉が一般に用いられるようになったのは、昭和30年に前衛俳句が出現してからであつて、前衛俳句と区別する意味で、あるいは前衛俳句に対抗するためにことさら伝統俳句という呼び方をしたと見るのも間違ではない。前衛俳句以前の新傾向俳句や新興俳句に対して伝統俳句の呼び方をしたと言う例はあまり見られない」。

全部引用すると長くなるから重要な部分だけ拾つてみたが、引用部の前には「俳句は伝統に根ざした文芸であるから、それを今更ながら伝統俳句と呼ぶのはおかしい」という指摘がある。執筆者は草間時彦だが、この指摘もきわめて重要で、伝統俳句とはつまり昭和の時代に生まれた新しい呼称なのである。

ただ、「新興俳句に対して伝統俳句の呼び方をしたと言う例はあまり見られない」という叙述が少々ひっかかる。西東三鬼の『俳愚伝』のなかに、「新興俳句何するものぞ、伝統俳句の最後の晩鐘は、石田波郷がゴウーンと鳴らしてやる」という石田波郷の言葉が出てくるからだ。このエピソードを信じれば、伝統俳句はすでに新興俳句の対立概念として意識されていたことになる。あるいはこのときの波郷の言葉が、前衛俳句の時代に復活したのかもしれない。さらにいえば、伝統俳句という呼称だけが新しいわけではない。その言葉とともに、伝統俳句という新しい俳句が昭和の時代に生まれたのである。そもそもしま例に出した石田波郷は秋桜子の門下である。この文章では作品をあげて例証する余裕がないが、処女句集『鶴の眼』における波郷の新鮮な作風は、新興俳句以前にはなかったものだ（このことは近刊の『俳句のモダン』に書いてあるので、あわせて読んでいただくと嬉しい）。

伝統俳句といっても、そのルーツは虚子であって俳諧の伝統からは切れているから、やはり崩壊した文化的なサロンの代償として、五七五の定型を支える共同性を必要としている。昭和の伝統俳句が、旧来の俳句と大きく異なるのは、その代償としての共同性が、季語だけでは充分でなくなってきたことだ。

季語がいれば伝統的な第一主題だとすれば、俳句が現代

意味で）使う人も少なくない。

ちなみに短歌の世界では、「伝統短歌」という言葉はない。そもそも伝統俳句という呼び方自体が、草間時彦もいうように「おかしい」のである。それが原因で、「現代俳句」の意味もおかしくなっている。「現代俳句」は、あくまでも現代の俳句であって、それ以外のなにものでもない。『現代俳句の世界』と題するこの本も、その意味で使っていることはあきらかで、さらにいえば昭和と平成の俳句を対象としている。明治と大正が近代なら、昭和と平成を現代と呼ぶのはごく一般的だろう。

ところで「現代俳句」について、もうひとつ大きな誤解がある。それは次のような考え方だ。

かつて新興俳句と伝統俳句の対立があり、また前衛俳句と伝統俳句の対立があった。新興俳句や前衛俳句では、無季俳句がずいぶん流行したが、今日ではその無季俳句があまり作られなくなった。また、かつて前衛俳句の作者として活躍した人たちが、今日ではちゃんと季語を使って、意味のわかる俳句を作っている。ということはつまり、新興俳句や前衛俳句は時代とともに消滅し、けっきょく伝統俳句が生き延びたのだ。そういう考え方である。

こうした誤解は、自分の俳句を伝統俳句だと考えている俳人に多いのだが、今日の「現代俳句」は、かつて伝統俳句と呼ばれた俳句とはあきらかに別のものだ。これも作品

の詩として成立するには、作者の時代意識を表現するための第二主題が必要になる。そしてこの第二主題も、ある共同性を手に入れていなければならない。先の新興俳句においては、その代表的なものが「戦争」であり、それが季語を押しのけて第一主題になったのが無季俳句である。

昭和の伝統俳句において、代表的な第二主題はたとえば「結核」であった。新興俳句が戦争俳句を生み、伝統俳句は療養俳句や境涯俳句を生んだといえる。ならばなぜ、戦争俳句はしばしば無季になり、療養俳句や境涯俳句は季語を必要としたのか。これはまたきわめて興味深い問題だが、今回は論じる余裕がない。また石田波郷、加藤楸邨、中村草田男らが人生探求派と呼ばれたが、この「人生探求」というテーマは、それこそ昭和の伝統俳句を象徴する第二主題といつていいだろう。

現代俳句

さて「現代俳句論―三つの視点から」という与題にそつて、最後にその「現代俳句」のことになるのだが、じつは「現代俳句」という言葉は、どうもあまり熟していないような気がする（だからカッコつきで使う）。わたしはそのまま現代の俳句として（現代短歌や現代詩というのと同じように）理解しているのだが、これを先の伝統俳句の対立概念として（新興俳句や前衛俳句の系統にある俳句という

を例としてあげる余裕がないが、たとえば中原道夫や正木ゆう子は、能村登四郎の門下だから伝統俳句の系統と正しいと思うが、その作風は昭和の伝統俳句とはずいぶん違う。これはきちんと認識されなければならない。

新興俳句や前衛俳句が減びて、伝統俳句が生き残ったのではない。それらの俳句が相互に影響し合い、その結果として現代俳句が存在しているのだ。新興俳句における自由な文体（山本健吉が否定的に「や・かな」の忌避として指摘したもの）や、前衛俳句における詩的なメタファの導入という試みがなければ、けっして現代俳句における表現のレベルは成り立たない。表現史とはそういうものだ。

もちろん、依然として昔の伝統俳句をなぞったような句もある。そうした作品は、現代俳句としての魅力に欠けるというだけのことだ。

いま述べたような誤解が生じるのは、無季俳句の減少という傾向に象徴されるように、「現代俳句」がどちらかというと伝統俳句のほうに近いからだ。しかしこれを伝統俳句という言葉でとらえて、俳句の表現がけっきょく季語を本質とする場所に収斂していくと考えるのは、あまりにも早計だといえない。それは現代という時代の、きわめて時代的な状況かもしれないからだ。そう考えることができれば、俳句の批評自体が減びることになる。